

ノーベル賞の国際政治学

—ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人推薦者(1)—

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize:
The Nobel Peace Prize and Japan, Japanese Nominators after World War II (1)**

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

第二次世界大戦後、日本人はノーベル平和賞の候補のみならず、推薦者にもなっていた。第二次世界大戦以前よりも積極的に、日本人は日本の個人、外国の個人、団体を推薦していた。史料が利用できる1945年から1964年までの期間に日本人が推薦した日本の個人は、賀川豊彦と鈴木大拙の2名であるが、これについては既に別稿にて考察した。また、外国の個人、団体は、個人12名、団体5である。日本人が推薦したこれらの候補がノーベル平和賞を受賞することはなかった。複数回、推薦されたのは、アメリカ人宗教家のフランク・ブックマン（1951年、52年、53年、56年、59年、61年）、ドイツ系アメリカ人平和主義者のゲルトルード・ベール（1955年、56年、57年、58年、59年）とそのかかわる婦人国際平和自由連盟（1955年、56年、57年、58年）、アメリカ人産児制限活動家のマーガレット・サンガー（1953年、60年）、世界エスperant協会（1962年、63年）である。

推薦者は、政治家、大学教授が多い。度々候補を推薦する日本人も出ている。政治家の場合、ブックマンの推薦にみられるように、連名で多くの者が署名をしている。これは、国際的な推薦キャンペーンの一環で参加したものと考えられる。1950年代以降、こうした機会を経験することで、ノーベル平和賞の推薦が日本人にとってより身近なものになったのであろう。

キーワード：ノーベル平和賞、ノーベル委員会、フランク・ブックマン、ゲルトルード・ベール、婦人国際平和自由連盟、マーガレット・サンガー、世界エスperant協会、ノルウェー

Summary

There were Japanese nominators as well as nominees for the Nobel Peace Prize after World War II. Those Japanese nominators recommended more Japanese and foreign individuals or organizations after the war than before. The author already examined in another paper Toyohiko Kagawa and Daisetz T. Suzuki, Japanese nominees recommended by Japanese nominators during the period from 1945 to 1964 when the historical materials were available. Foreigners and foreign organizations nominated by Japanese nominators were twelve individuals and five organizations. Any individuals or organizations nominated by Japanese were not awarded the Nobel Peace Prize. The individuals and organizations nominated more than once were Frank Buchman, an American Christian evangelist (1951, 1952, 1953, 1956, 1959 and 1961), Gertrude Baer and the Women's International League for Peace and Freedom, a German-American pacifist and the relevant organization (1955, 1956, 1957, 1958 and 1959), Margaret Sanger, an American activist for birth control (1953 and 1960), and the Universal Esperanto Association (1962 and 1963).

Most of the Japanese nominators are politicians and university professors. Some nominators offered more than one recommendations. As seen in the case nominating Buchman, politicians signed the nomination paper in their joint names, which would appear that they did as participation in part of international nomination campaign. Such experience seems to have made nomination for the Nobel Peace Prize more familiar to Japanese.

Keywords: the Nobel Peace Prize, the Nobel Committee, Frank Buchman, Gertrude Baer, Women's International League for Peace and Freedom, Margaret Sanger, Universal Esperanto Association, Norway

はじめに

本稿は、第二次世界大戦後ノーベル委員会にノーベル平和賞候補を推薦した日本人の推薦状況をノルウェー・ノーベル研究所にある史料で明らかにしたものである。

第二次世界大戦以前¹⁾と同様に、戦後も日本人はノーベル平和賞候補になるとともに、推薦者になっていた。本稿では、第二次世界大戦終結から史料の公開されている1964年までの間に個人、団体を推薦した日本人に焦点を当て、誰が誰をいかなる理由から推薦していたかを明らかにする。1950年代以降、日本人の推薦活動は活発化した。1951年以降、毎年のように日本人が

推薦者として登場している。この時期、日本人が日本人をノーベル平和賞候補として推薦した事例もあった。すなわち、日本人が1954年、1960年に社会事業家・牧師・作家の賀川豊彦を、1963年に仏教哲学者の鈴木大拙を推薦していた。この2名については、すでに別稿で取り上げたため、本稿の分析対象とはしない²⁾。

日本人が推薦した外国の個人、団体は多い。12名の個人と5つの団体である³⁾。回数の最も多いのは、1951年、1952年、1953年、1956年、1959年、1961年の6回推薦されたアメリカ人宗教家のフランク・ブックマン (Frank Buchman) である。なお、1953年には、その活動母体である道德再武装 (MRA: Moral Re-Armament。以下、MRAと略) 運動も同時に推薦されている。ブックマンに続くのは、ドイツ系アメリカ人平和主義者のゲルトルード・ベール (Gertrude Baer) と婦人国際平和自由連盟 (前者は1955年、1956年、1957年、1958年、1959年の5回、後者は1955年、1956年、1957年、1958年の4回)、アメリカ人産児制限活動家のマーガレット・サンガー (Margaret Sanger、1953年、1960年の2回)、国際エスペラント協会 (1962年、1963年の2回) である。以上、言及した個人、団体以外に、9名の個人、2団体が各1回推薦されている。

本稿では、上記のブックマンとMRA、ベールと婦人国際平和自由連盟、サンガー、国際エスペラント協会、その他の候補に分けて、各候補に対する日本人推薦者、推薦状況を整理し、その特徴をまとめる。推薦状の数が多いため、それぞれ簡潔に紹介する。分析のための基本資料は、ノルウェー・ノーベル研究所の所蔵する推薦状ファイル、同研究所の年次報告書である。

1 フランク・ブックマンとMRAの推薦

(1) フランク・ブックマンとMRA

フランク・ブックマン (1878～1961年) は、MRAの創始者として国際的に活躍したアメリカ人宗教家である⁴⁾。1878年にアメリカのペンシルヴェニア州で生まれ、大学で神学を学んだ。第一次世界大戦後、英国に渡り、1921年、「正直、純潔、無私、愛」の4つの絶対標準に重点を置く、自己変革、世界変革の運動を開始した。これは、当初、イギリスのオックスフォード大学の学生、教員らを中心に広がったため、「オックスフォード・グループ」と呼ばれた。その後、運動は他のヨーロッパ諸国などにも広がりを見せた。これが元になり1938年にMRAに名称を変更し、より幅広い思想運動になった。この運動は、特に第二次世界大戦後、キリスト教を土台としつつも、共産主義に対抗するイデオロギーであることを強調した。そのため、冷戦下において西側陣営の結束を促すことになり、欧米のキリスト教国に限定されず、アジア、アフリカ諸国も含む国際的な政治運動、社会運動へと発展した。

後述のように、日本においても、MRAは政界、経済界の重鎮をはじめ国民の間に支持を広げ、大きな影響力をもった。政党で言えば、自由党、民主党、さらに保守合同後の自由民主党の他、

改進黨、さらに社会党からも支持された。

(2) 推薦状況

日本人によるブックマンの推薦は、表1の通り1951年、1952年、1953年、1956年、1959年、1961年の6回みられる。1953年には同時にMRA自体も推薦されている。選考年順にそれぞれの推薦状況を簡単にみていこう。

①1951年の推薦

最も早い例としてノーベル委員会の記録に残るのは、山田節男参議院議員（社会党）の1951年1月30日付け電報である⁵⁾。翌日1月31日にノーベル委員会に到着している。電報であるため、文面は短いものである。すなわち、「我々日本国会両院の議員は、フランク・ブックマン博士のノーベル平和賞推薦をその世界平和継続への最大の貢献のため強く支持いたします」と、英文で記されている。電文末の氏名は「SENATOR SETIYO=YAMADA」となっているが、山田節男参議院議員と考えられる。この推薦状は、1951年推薦状ファイルに保存され、ノーベル委員会の正式な1951年候補リストに記録されている⁶⁾。

なお、1951年については、1951年1月28日付けの一万田尚登日本銀行総裁の推薦状も存在する（通常、ノーベル委員会によって推薦状に記入される手書きの受領日は記入されていない⁷⁾）。ブックマンは1952年にも推薦されていたが、同推薦状は他の推薦状とともに1952年推薦状ファイルに保存されていた。日本銀行総裁は、ノーベル平和賞の正式な推薦資格をもたないため、一万田の推薦状は正式な推薦状としては受理されなかったが、参考資料として使われたと考えられる。1951年ではなく、1952年の推薦状ファイルに入っていた理由であるが、推薦状の内容から推測すると、この推薦状の差出日は「1952年」1月28日の誤りではないかと考えられる。一万田は、推薦状の本文で「昨年」のサンフランシスコ講和会議の様子に言及しているが、同会議は1951年9月に開催されているからである。

一万田は、日本銀行総裁（1946～1954年）、さらにその後大蔵大臣（1954～1956、1957～1958年）になる人物であり、日本におけるMRA運動にも積極的にかかわり、普及に努めた。

一万田の推薦状にはブックマン推薦の意義が簡潔に整理されているため、正式な推薦状とはいえないが、その内容を簡単にみておこう。一万田は、ブックマンの活動が日本にとっても重要であったと主張する。その理由として、サンフランシスコ講和会議で多くの国、特にアジアの国の代表たちに信頼と友好的な雰囲気の中で会えたのはブックマンのおかげとする。また、ブックマンとMRAが、戦後、戦争をした国の指導者たちとの個人的接触を確立する最初の手段を提供したこと、絶対的な道德標準に忠実になることにより、戦争に起因する恐怖、疑念、憎悪を克服できたこと、共産主義に対する見事な代替策を提供していることも挙げている。なお、一万田は、ブックマンに宛てたメッセージを参考資料としてこの推薦状に添付している⁸⁾。同メッセージは、

ノーベル賞の国際政治学

表1 第二次世界大戦後のノーベル平和賞日本人推薦者一覧 (1) ブックマン・道徳再武装

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付(発出地)
1951	フランク・ブックマン (Frank Buchman)	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	山田 節男	参議院議員	1951年1月30日付電報(東京)
1952	フランク・ブックマン	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	一万田尚登	日本銀行総裁	1951(1952?)年1月28日付(東京)※1
			三木 治朗	参議院議員、副議長	1952年1月22日付(東京) 右派社会党18名の連名
			小泉 秀吉	参議院議員	
			下條 恭兵	参議院議員	
			山田 節男	参議院議員	
			田中 一	参議院議員	
			伊藤 修	参議院議員	
			曾祿 益	参議院議員	
			小松 正雄	参議院議員	
			赤松 常子	参議院議員	
			片岡 文吾	参議院議員	
			渡多野 勝	参議院議員	
			中村 正雄	参議院議員	
			松浦 清一	参議院議員	
			吉川末次郎	参議院議員	
			棚橋 小虎	参議院議員	
			加藤シツエ	参議院議員	
			山下 義信	参議院議員	
			片山 哲	元首相、衆議院議員	
			松本 七郎	衆議院議員	
			山田シツエ	衆議院議員	
			松岡 駒吉	衆議院議員	
			堤 ツルヨ	衆議院議員	
			三宅 正一	衆議院議員	
			川島 金次	衆議院議員	
			戸叶 里子	衆議院議員	
			受田 新吉	衆議院議員	
前田 種男	衆議院議員				
浅沼稲次郎	衆議院議員				
佐藤 高武	参議院議長				
田村 文吉	参議院議員、元郵政大臣				
伊達源一郎	参議院議員				
平沼弥太郎	参議院議員				
徳川 宗敬	参議院議員、元副議長				
早川 愼一	参議院議員				
林 譲治	衆議院議長				
北村徳太郎	衆議院議員、元大蔵大臣				
栗山長次郎	衆議院議員				
中曾根康弘	衆議院議員				
星島 二郎	衆議院議員、元商工大臣				
吉米地義三	衆議院議員、元運輸大臣				
福田 篤泰	衆議院議員				
森戸 辰男	広島大学学長、政治学教授、 国立大学協会副会長、元文部大臣				
1952					1952年1月24日付(広島)
1953	フランク・ブックマン 道徳再武装運動(MRA)	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	天野 貞祐	文部大臣	1952年1月25日付(東京)
			河上丈太郎	衆議院議員	
			浅沼稲次郎	衆議院議員	
			松岡 駒吉	衆議院議員、元議長	
			片山 哲	衆議院議員、元首相	
			受田 新吉	衆議院議員	
			西村 栄一	衆議院議員	
			杉山元治郎	衆議院議員	
			田原 春次	衆議院議員	
			川島 金次	衆議院議員	
			川俣 清吾	衆議院議員	
			松沢 兼人	元衆議院議員	
			中村 高一	衆議院議員	
			三宅 正一	衆議院議員	
			富吉 栄二	衆議院議員	
			今澄 勇	衆議院議員	
			三木 治朗	参議院議員、元副議長	
			西尾 末広	衆議院議員	
			棚橋 小虎	参議院議員	
			菊川 忠雄	衆議院議員	
			三輪 寿三	衆議院議員	
			松本 七郎	衆議院議員	
			相馬 助治	参議院議員	
			大矢 省三	衆議院議員	
			下條 恭兵	参議院議員	
			田万 広文	衆議院議員	
			曾祿 益	参議院議員	
			河野 密	衆議院議員	
			中村 敏	衆議院議員	
			加藤シツエ	参議院議員	
			山花 秀雄	衆議院議員	
			山田 節男	参議院議員	
			戸叶 里子	衆議院議員	
			加藤 勘十	衆議院議員	
			重光 葵	衆議院議員	
			三木 武夫	衆議院議員	
			大塚 唯男	衆議院議員	
			川崎 秀一	衆議院議員	
			北村徳太郎	衆議院議員	
			松本 滝蔵	衆議院議員	
			中曾根康弘	衆議院議員	
			松村 謙三	衆議院議員	
			星島 二郎	衆議院議員	
			益谷 秀次	衆議院議員	
			根本龍太郎	衆議院議員	
			西村 茂生	衆議院議員	
			首藤 新八	衆議院議員	
浅利 三朗	衆議院議員				
栗山長次郎	衆議院議員				
木村篤太郎	保安庁長官				
戸叶 武	東海大学教授(政治学)				
1953					1953年1月25日付(東京) 改進黨8名の連名
1956	フランク・ブックマン	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	鳩山 一郎	首相	1956年1月30日付電報(東京)
1959	フランク・ブックマン	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	星島 二郎	衆議院議員	1958年12月31日付(東京)
1961	フランク・ブックマン	アメリカ人宗教家、道徳再武装(MRA)運動創始者	岸 信介	前首相	1961年1月22日付(東京)

註:現時点で史料公開されている1964年までを扱った。肩書は、基本的に推薦状に使われたものを載せた。
 ※1 1952年のフランク・ブックマンについて、一万田尚登の推薦状は1951年ではなく、1952年に差し出されたと考えられる。
 出所: Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjørelse for Nobel Fredspris およびノーベル研究所史料より、筆者作成。

1952年1月付けのものであり、日本におけるM R Aの重要性を指摘するとともに、日本でM R A世界大会を開催するよう希望し、一万田をはじめ経済界、政界の20名が署名している。

②1952年の推薦

1952年には、より積極的にブックマン推薦が日本からなされている。1952年1月22日付けで参議院議員、衆議院議員の連名の推薦状4通がノーベル委員会に提出されている。同日、同形式の推薦状が出されていることから、国会議員が連携して提出したと考えることができよう。

まず三木治朗参議院議員らの推薦状は、右派社会党所属の参議院議員計18名の連名によるものである⁹⁾。この推薦状は、M R Aを通じて生きた民主主義を日本に紹介したブックマンに深い感謝を表した後、具体的な説明をしている。平和条約調印3年前から、M R Aの世界大会に日本人指導者を招き、ブックマンが平和建設の仕方を示し、日本と他国の指導者との間の和解をもたらした事、日本と世界の労働者が結束する方法をM R Aが示していること、ブックマンが団結と平和の最強の要素、すなわち共産主義やあらゆるタイプの全体主義に応酬する人間性の変革を日本にもたらした事、多くの日本人の考え方や生き方の変化により、旧敵の恐怖を鎮め、M R Aを通じて平和と安全保障により太平洋、東南アジアにおいて隣人として生きていける自信を得たことが挙げられている。

次に、同じく1952年1月22日付けの松本七郎衆議院議員らの推薦状は、同じく右派社会党の衆議院議員計10名の連名によるものである¹⁰⁾。内容は、前述の三木治朗議員らの推薦状とほぼ同文であり、違いはない。

1952年1月22日付けの佐藤尚武参議院議長らの推薦状は、自由党、緑風会の参議院議員計6名の連名によるものである¹¹⁾。同推薦状は、ブックマンがM R Aを通じて世界平和の樹立に向けてユニークかつ顕著な貢献をしたために、ノーベル平和賞にブックマンを推薦するとしている。日本についての貢献として、日本が自由で安定した平和愛好国として世界において地位を占めることができるよう、日本人の間で民主主義を機能させるために道徳的、精神的なはずみをもたらした事、第二次世界大戦後、日本と他国との間に信頼と互恵的関係を再構築した事を挙げ、責任ある民主的国民として生きる道をブックマンが日本人に示したとしている。

この推薦状と同文のものが、1952年1月22日付けで林議治衆議院議長らによってもノーベル委員会に提出されている¹²⁾。自由党、民主党の計7名の連名によるものである。

1952年には、ブックマンに対して以上の連名の推薦状4通のほか、単独の推薦者による推薦状も2通ある。1つは、森戸辰男広島大学学長、元文部大臣による1952年1月24日付け推薦状である¹³⁾。森戸は、平和的な新生日本に向けてブックマンのM R Aの貢献を高く評価すべきだと述べた後、広島のことを取り上げている。すなわち、森戸が過去2年間広島大学学長を務めていること、原爆を落とされた同市が日本の国会によって平和記念都市として公式に指定され、平和日本の建設において極めて重要な位置を占めていること、現市長、元市議会議長、元県知事はス

イスでのMRA世界大会に出席し、MRAの精神を伝えることで、平和都市広島のリ建に道徳的、精神的基礎を与えたと述べている。

もう1通の推薦状は、天野貞祐文部大臣による1952年1月25日付けのものである¹⁴⁾。天野は、個人や国家の間で法と秩序の尊重や道徳が低水準まで落ち、我々の文明が墮落と破壊にさえ直面している時に、ブックマンにより創立されたMRAのプログラムは現代の最も重要な発展の1つであると述べ、MRAを高く評価している。それに続けて、天野は、道徳教育が平和には絶対に必要であるとし、ブックマンがどの国にとっても妥当する道徳標準を我々に示したことで大きな貢献をしたとも述べている。最後に、MRAの精神が、日本を平和愛好国という家族の信頼に足る構成員になるよう導く原理にまさしく違いないと天野は結論づけている。

以上、1952年の推薦状を簡単に紹介したが、国会議員を中心に左右を問わずMRAを創立したブックマンを高く評価し、ノーベル平和賞候補に推薦している。共産主義に対して道徳的な対抗軸になることを期待するとともに、日本が戦後平和国家として再建され、近隣諸国と和解する過程でブックマンとMRAが果たした役割にも感謝の言葉が述べられている。

③1953年の推薦

1953年にもブックマンを推薦する推薦状が日本から5通出されている。そのうち3通は、前年にもみられた多数の国会議員による連名形式のものである。

まず1953年1月19日付けの河上丈太郎衆議院議員らの推薦状は、右派社会党所属の衆議院、参議院議員計33名の連名によるものである¹⁵⁾。同推薦状は、世界を統一するブックマンとMRAのイデオロギーに深い感謝を示したいと冒頭に記したのち、その理由を具体的に論じている。平和条約調印の3年前から日本人がMRAの世界大会に参加するようになり、これらの大会が恒久平和への道を示し、日本と多くの旧敵国との和解を成し遂げる上で最も効果的な要因となったこと、ブックマンとMRAの活動が階級戦争への前向きな代替策であるイデオロギーを世界に提供していること、日本においては我々国民を統一する唯一の基盤であり、世界平和に死活的であると信じられる成果であること、ブックマンの4月来日が待ち遠しいことを指摘した後、最後にブックマンとMRAを1953年ノーベル平和賞候補に推薦している。

1953年1月25日付けの重光葵衆議院議員らの推薦状は、改進黨所属の衆議院議員計8名の連名によるものである¹⁶⁾。同推薦状は、まずブックマンとMRAを1953年ノーベル平和賞に推薦したいと記したのち、欧米でのMRA大会に日本代表団が出席することで、日本が戦後すぐに自由主義諸国の家族に再び参加できたこと、アジアでのブックマンとMRAの活動により日本代表団は旧敵国と新しい精神の下で会い、その国民と率直で互恵的關係を樹立できたことに感謝していること、本年春に日本でMRA世界大会を開催するようブックマンとMRAに要請してきたことを挙げている。

国会議員の連名による推薦状には、星島二郎ら自由党衆議院議員計7名のものもある¹⁷⁾。これ

には差出日がないが、これまで紹介してきた推薦状とともに1953年ファイルに保存されている。同推薦状は、自由主義諸国の家族の中で我が国を再建するのを支援してくれた貢献に対してブックマンとMR Aに深い感謝を表明している。続けて日本と他国との講和と理解のために行なった活動として、以下の6点を挙げている。すなわち、第1に国際会議への日本人の初参加を可能にしたこと（1948年6月のカリフォルニアでのMR A大会）、第2に戦後初の大規模日本人代表団の欧米訪問と指導者との会談をアレンジしてくれたこと（1950年6月）、第3に国会議員2名による米議会両院での史上初の演説を可能にしたこと（1950年7月）、第4にサンフランシスコ講和会議において、それまで会えなかった他国の代表に信頼と友好の相互の雰囲気の中で会えるよう支援してくれたこと（1951年9月）、第5に250名以上の日本人代表たちが欧米でのMR A大会に出席でき、民主的生活の道徳的、精神的土台について深く洞察できるようにしてくれたこと、第6にMR Aアジア大会において国会議員らが旧敵国であったアジア諸国の指導者と会う機会を提供してくれたこと（1952年10月のコロンボ、1952年12月のニューデリー）である。この推薦状は、これまでの推薦状において断片的に紹介されてきたMR Aの支援による日本の国際社会復帰の過程を時系列に沿って説明しており、理解しやすい内容となっている。

1953年には、その他に2通の推薦状が個人によって提出されている。まず1953年1月25日付けの木村篤太郎保安庁長官による推薦状である¹⁸⁾。木村は、公私の生活に大胆に適用される普遍的道徳標準に基づいてのみ国家間の平和が保障されうるとの深い確信を披露した後、MR Aが国家間の理解を生み出す強力かつ現実的手段であると述べている。さらに木村は、日本の安全保障の部隊に責任を負う関係として、MR Aがわが国でつくっている道徳的力が日本国内の安全保障と統一の基礎であるに違いなく、そうした力を高く評価すると指摘した上で、最後にブックマンとそのMR Aのプログラムをノーベル平和賞に推薦している。日本の安全保障と統一という観点から、MR Aの道徳標準を高く評価する主張であった。

もう1通の推薦状は、1953年1月26日付けの戸叶武東海大学教授によるものである¹⁹⁾。戸叶は、国連憲章前文のいうように、平和は人の心の中で始まるとするが、国連はその現実化を効果的に成し遂げてはいないと批判した上で、ブックマンとMR Aが四半世紀以上にわたりその最も根本的な戦争原因について活動してきたとする。戸叶は、ブックマンとMR Aが開拓してきた方法を通じてのみ平和の欲求は達成しうるであると主張している。こうして、戸叶はブックマンとMR Aを1953年ノーベル平和賞候補に推薦しているのである。

以上のように、1953年の推薦状も、それ以前と同様に、ブックマン、MR Aによる日本の国際社会復帰への支援を高く評価していた。さらに、木村、戸叶による2通の推薦状にみられるように、冷戦下で日本の安全保障と統一、さらに平和を達成する手段としてブックマンとMR Aの主張の有効性を強調する見方も提示されたのである。

1952年、1953年のブックマン、MR A推薦に共通する特徴としては、多数の国会議員が政党単位でまとまり、連名で推薦状を執筆した形が多いことである。文面すら同じ推薦状もあった。

連名の推薦状だけを取り上げても、1952年に41名、1953年には48名の国会議員が署名していた。また、1953年にはどの推薦状もブックマンという個人だけではなく、MR Aという組織も同時に候補に推薦していた。これらの連名の推薦状の背景には、ブックマンとMR Aのノーベル平和賞推薦について、MR A関係者から働きかけが日本の国会議員に対してあったのかもしれない。

④1956年の推薦

1953年以後も、ブックマンは日本の政治家により推薦され続けた。しかし、それまでとは異なる特徴がある。それは、大人数の連名による推薦状が姿を消し、代わりに1名もしくは2名による推薦状となったことである。

1956年には、同年1月30日にノーベル委員会着の電報で鳩山一郎首相が単独でブックマンをノーベル委員会に推薦している²⁰⁾。それは、以下のような文面である。「国際的理解と恒久平和に向けて行なっている貢献からみて、フランク・ブックマン博士をノーベル平和賞に推薦したい。道徳再武装は、太平洋での戦争が日本と隣国との間につくり出した憎悪の遺産を癒す上で効果的であることを示した。過去の傷を癒している。昨夏のMR A政治家使節の訪問も、東西統一の実際的方法を実証した。人道に対するブックマン博士の献身を貴委員会が認めることで、世界平和確立のために働くすべての人の努力を強力に支援することになると確信している。」

この推薦状は、ブックマンとそのMR Aの活動が、戦後、日本と隣国との和解に貢献し、さらに東西の統一、世界平和に貢献しているとの内容であり、これまでの推薦状と同様の内容といえよう。多数の国会議員の名前はないものの、現職の首相が単独で推薦しており、十分に重みがある推薦状であった。

鳩山首相は、ブックマンのMR Aともかかわりがあった。1955年6月には、MR Aの代表団が来日し、国内で音楽劇を行なっているが、鳩山首相は代表団を歓待し、音楽劇も鑑賞している。翌年4月末には、ブックマンはアジア歴訪中、東京にも立ち寄っている。ちょうど国会が紛糾している時であり、ブックマンの来訪でそれが収まったとされる。ブックマンは、滞在した1週間に精力的に活動した。鳩山首相は私邸にもブックマンを招き、懇談の機会をもった。また、政府はブックマンに勲二等旭日章を授与することを決め、重光葵外相が外務省において勲章をブックマンに授与している²¹⁾。

⑤1959年の推薦

1959年の選考では、星島二郎衆議院議員（自民党）、加藤シヅエ参議院議員（社会党）が1958年12月31日付けの連名による推薦状でブックマンをノーベル平和賞に推薦している²²⁾。同推薦状は、日本と隣国との関係が同地域の平和と安定に重要であると信じるので、その最近の展開を報告するという形式で書かれている。大きく4点の具体的事例が挙げられている。第1に、1958年3月にフィリピンのバギオにおいてMR Aアジア大会が開催され、日本人50名が招待さ

れた。岸首相は、これに私的代理として松本邦夫国会議員を派遣した。第2に、日本の代表団はマニラで演劇を上演したが、これは戦後初の日本人による演劇であった。上演後、観衆の多くが感謝を述べるため舞台に駆け上がった。これをみた湯川日本大使〔湯川盛夫、任期1957～1961年—筆者、以下同様〕は「外交では数年かけてもできなかったことをあなた方は短時間に成し遂げることができた」と述べた。第3に、岸首相は、最近の東南アジア、オーストラリア歴訪〔1957年11月～12月〕後、ブックマンに「分断された人々の間に統一を作り出す上で、M R Aの有効性に私は感銘を受けています。過去の傷を癒すために、誠実な謝罪の力を経験しました。……」というメッセージを記した。第4に、フィリピン、日本両政府はブックマンに叙勲を行なった。1958年4月には、東京でM R Aのためのレセプションが開かれ、松本滝蔵外務政務次官が政府、外務省を代表して、日比賠償協定調印への地ならし、日韓国交正常化交渉再開に向けた日韓の緊張緩和、国民党政府との論争での支援を挙げて、M R Aに謝辞を述べた。

以上の事例を示したのち、星島と加藤は「東南アジアの統一に向けた فرانク・ブックマン博士とM R Aによってなされた貢献は、世界のこの地域の将来、平和と自由に死活的な重要性をもつことを強く確信いたします」と結び、ブックマンを1959年ノーベル平和賞候補に推薦しているのである。

この推薦状は、日本・フィリピン関係に重点を置き、最近の出来事を詳細に紹介している。星島と加藤は、バギオにおけるM R Aアジア大会にも代表団の一員として参加している。そのため、推薦状は自身の体験を踏まえ、これまでの推薦状よりも具体的な体裁をとったと考えられる。

⑥1961年の推薦

1961年には、岸信介前首相が単独でブックマンをノーベル平和賞に推薦している²³⁾。1961年1月22日付けの推薦状の冒頭で、岸は、ブックマン博士とM R Aの活動に深く感謝していることを伝えたいと記したのち、主に2つの点を主張して、ブックマンを平和賞候補に推薦している。第1に、岸はブックマンへの新年のメッセージを引用して、現代世界におけるM R Aの重要性を強調している。すなわち、「今日、世界情勢は極めて危機的であり、どの国もたとえ大国でも、自由と信仰への世界大の攻撃に直面して単独では存立できない。……昨夏の我々の経験が示すのは、イデオロギーの攻撃に対してイデオロギーなしには応酬できないということである」と述べた上で、「我々が今最も必要としているのは、攻勢に出て、M R Aのイデオロギーを我が政府、我が国民の政策にすることである」としている。第2に、戦後のフィリピンとの関係改善を事例にして、「M R Aの精神を通じて我々日本人はアジアの旧敵の多くから信頼を再び獲得することができた」と述べている。さらに、ガルシア(Carlos P. Garcia 任期1957～1961年)大統領やその前任者のマグサイサイ(Ramon Magsaysay 任期1953～1957年)大統領は、フランク・ブックマン博士とM R Aが戦後、フィリピン・日本間の真の講和の土台をつくったとして、公の場でしばしば感謝を表明しているとも指摘している。

岸も、鳩山首相と同様に現役首相の時からブックマンとかかわりがあった。岸首相が訪米した際、岸はブックマンに電話をかけ、MR Aが日本に行なったことに対して礼を述べたとされる²⁴⁾。また、1959年ノーベル平和賞選考に向けて出された星島、加藤の推薦状にも触れられているように、MR Aアジア大会に私的代理を派遣し、さらにはブックマンにお礼のメッセージを送っていることから、岸とブックマンの関係を見出せる。岸にとって、ブックマンは対東南アジア関係の再構築や共産主義に対抗するイデオロギーといった点で評価に値するものであったのであろう。

しかし、岸がブックマンをノーベル平和賞に推薦したのは、1961年が初めてのことであった。岸にとっては、ブックマン以外にもノーベル平和賞の推薦にかかわるのは初めてのことであった。1951年以来、多数の国会議員がブックマンをノーベル平和賞に推薦してきたが、そこに岸の名前はなかった。戦後、公職追放になった岸が衆議院議員に復帰したのは1953年4月であるため、1952年、1953年にみられた大掛かりな推薦キャンペーンにはかかわりがなかったと考えられる。それ以後も岸はブックマンのノーベル平和賞推薦の動きにはかかわりをもたず、1961年に突然推薦を行なっている。その理由は不明であるが、ブックマンを推薦しようと運動する関係者から依頼を受けた結果ではないかと考えられる。

(3) ノーベル委員会の評価

以上のように、ブックマンとMR Aは日本人の政治家により度々推薦されてきたのであるが、日本人だけが推薦したのではなかった。日本人以外からも、ブックマンとMR Aはノーベル平和賞に何度も推薦されていた。ブックマンがノーベル平和賞に推薦されたのは、1951年、1952年、1953年、1954年、1955年、1956年、1957年、1958年、1959年、1961年の10回である（表2参照）。同じくMR Aは、1953年、1956年、1959年、1962年の4回である（表3参照）。推薦者の数から判断すると、1950年代後半は推薦活動が下火となったことがわかる。1961年に再び推薦活動がやや活発化するが、同年8月にブックマンは亡くなり、推薦活動は終結することになった。

以上の推薦のうち、ノーベル委員会が選考過程で候補を絞り込んだショートリストにブックマンを載せ、報告書を作成したのは、1951年、1952年、1953年、1954年、1961年の5回である²⁵⁾。1953年は、ブックマンとMR A両方についてまとめて報告書を作成している。1950年代前半には毎年報告書が作成されており、ノーベル委員会がブックマンとMR Aの活動に注意を払っていたことがわかる。しかし、いずれの年もブックマンもMR Aもノーベル平和賞に選出されることはなかった。

全体の推薦状況と日本人による推薦を照らし合わせると、以下の特徴を指摘できるであろう。日本側が最も熱心にブックマンとMR Aのために推薦活動をしたのは、1952年、1953年であった。単独の推薦状が出された1951年、1956年、1959年、1961年に比べると、1952年、1953

表2 ブックマンの推薦状況

選考年	候補総数 (個人、団体)	ショート・リスト 総数	ブックマンの推薦者 数(ノーベル委員会 記録)	日本人のブックマン 推薦数(ノーベル委 員会記録)※1	ノーベル委員会 の報告書
1951	36(29、7)	7	16	1	有
1952	31(27、4)	6	22	3	有
1953	38(33、5)	9	25	3	有
1954	24(19、5)	4	13	0	有
1955	37(32、5)	8	7	0	
1956	28(23、5)	6	12	0	
1957	25(22、3)	7	1	0	
1958	26(21、5)	8	2	0	
1959	32(27、5)	11	1	1	
1961	42(39、3)	8	8	1	有

※1 ノーベル委員会が正式に記録した推薦状の数。参考資料として使われたものは含んでいないため、表1との間に差が生じている。

出所：Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobel Fredspris*、ノーベル財団ノミネーション・データベース<<http://www.nobelprize.org/nomination/archive/>>、ノルウェー・ノーベル研究所の推薦状ファイルにより、筆者作成。

表3 道徳再武装の推薦状況

選考年	候補総数 (個人、団体)	ショート・リスト 総数	道徳再武装の推薦者 数(ノーベル委員会 記録)	日本人の道徳再武装 推薦数(ノーベル委 員会記録)※1	ノーベル委員会 の報告書
1953	38(33、5)	9	1	0	有 ※2
1956	28(23、5)	6	2	0	
1959	32(27、5)	11	1	0	
1962	39(33、6)	7	1 ※3	0	

※1 ノーベル委員会が正式に記録した推薦状の数。参考資料として使われたものは含んでいないため、表1との間に差が生じている。

※2 この報告書は、ブックマンとまとめて作成された。

※3 1962年の推薦は、後に取り下げられた。

出所：Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobel Fredspris*、ノーベル財団ノミネーション・データベース<<http://www.nobelprize.org/nomination/archive/>>、ノルウェー・ノーベル研究所の推薦状ファイルにより、筆者作成。

年は極めて大掛かりな推薦活動が国会議員を中心に展開された。この両年は国際的にもブックマンとMRAをノーベル平和賞に推す推薦状がノーベル委員会に多く寄せられている。たとえば、ノーベル委員会が候補者リストに記した正式な推薦者だけでも1952年には22件が記録され、そのうち国会議員については日本以外にイタリア、スイス、スウェーデン、デンマーク、オランダ、南アフリカ、西ドイツ、フランス、アメリカ、トルコ、ギリシャから単独あるいは連名で推薦状が出されている²⁶⁾。また、1953年については25件の推薦が記録され、国会議員は日本以外にオランダ、西ドイツ、イタリア、アメリカ、スイス、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フランス、オーストラリアである²⁷⁾。同年、MRAは、ノーベル委員会の候補者リスト上は1件の推薦であった(多くの推薦状がブックマンとMRAを併記した形で書かれていたが、ノーベル委

員会は形式上、代表的な推薦者を1件のみ挙げたと考えられる。アメリカ上院議員1名が記されている)。

以上のように、多くの国の国会議員がブックマンとMRAを推薦していた事実を考えると、1952年、1953年には大規模な推薦キャンペーンが展開されたと考えるのが妥当であろう。その一環として日本の国会議員もそれに動員され、精力的に推薦したと考えられる。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) 日本人による戦前期の推薦動向については、以下を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補——」(『地域政策研究』第13巻第2・3合併号、2010年11月)、同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人推薦者——」(『地域政策研究』第14巻第2・3合併号、2012年1月)。
- 2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦——」(1)、(2・完)(『地域政策研究』第15巻第2号、第4号、2013年1月、3月)。同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補——」(『地域政策研究』第17巻第2号、2014年11月)。
- 3) ノーベル財団の運営するノミネーション・データベース (<http://www.nobelprize.org/nomination/archive/>) において、日本人候補、日本人推薦者を1963年まで検索できるようになった。しかし、ノルウェー・ノーベル委員会において候補、推薦者の日本人名を記録に残す際、誤記が多く発生し、それがそのままデータベースにも採用されている。そのため、本稿では原史料にあたり、正確な人名を特定した。また、正式な推薦者としては登録されなかったものの、推薦状ファイル(Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag) および付属ファイル(Bilag) に収録され、参考資料として使われた推薦状も多く存在する。それについても本稿では現時点で判明している分をできる限り取り上げたため、本稿のリストと上記ノミネーション・データベースの記録が一致しない場合もある。
- 4) ブックマンとMRAに関しては、以下を参照。フランク・ブックマン(MRAハウス編)『世界を再造する』相馬雪香訳(MRAハウス、1958年)。ピーター・ハワード『フランク・ブックマンの秘訣』相馬雪香訳(毎日新聞社、1962年)。MRAと日本との関係については、以下を参照。『澁澤雅英オーラルヒストリー』(政策研究大学院大学政策研究院、2004年)。
- 5) Letter from Setsuo Yamada to the Nobel Peace Prize Committee, dated 30 January 1951, PFL 65/1951, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1951.
- 6) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1951* (Oslo: Grøndahl & Søn's Boktrykkeri, 1951), s.8. なお、氏名は「Setiou」と記録されている。
- 7) Letter from Hisato Ichimada to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 28 January 1951, PFL Ad 18/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 8) MESSAGE TO DR. BUCHMAN January, 1952.
- 9) Letter from Jiro Miki et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 22 January 1952, PFL 77/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 10) Letter from Shichiro Matsumoto et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 22 January 1952, PFL 78/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 11) Letter from Naotake Sato et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 22 January 1952, PFL 79/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 12) Letter from Joji Hayashi et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 22 January 1952, PFL 80/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 13) Letter from Tatsuo Morito to the Nobel Peace Prize Committee, the Norwegian Parliament, dated 24 January 1952, PFL 83/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 14) Letter from Teiyu Amano to the Nobel Peace Prize Committee, the Norwegian Parliament, dated 25 January 1952, PFL 81/1952, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1952.
- 15) Letter from Jotaro Kawakami et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 19 January 1953, PFL 98/1953, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1953.
- 16) Letter from Mamoru Shigemitsu et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 25 January 1953, PFL Ad 98/1953, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1953.
- 17) Letter from Niro Hoshijima et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, no date, PFL Ad 98/1953, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1953.
- 18) Letter from Tokutaro Kimura to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 25 January 1953, PFL 96/1953, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1953.

- 19) Letter from Takeshi Togano to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 26 January 1953, PFL 97/1953, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1953.
- 20) Letter from Ichiro Hatoyama to the Nobel Peace Prize Committee, dated 30 January 1956, PFL 30/1956, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1956. 1956年には、Skardオスロ大学教授よりM R Aに関する日本の新聞記事（1956年5月、6月のThe Mainichi、Nippon Times、読売新聞）がノーベル委員会に提出されている。Brevet fra Eiliv Skard til det Norsk Stortings Nobelkomité, den 1. august 1956, Buchman, PFL Bilag 1956 (B-R). 同様に、1958年にもWikborgノルウェー国会議員よりM R Aに関するナイジェリア、フィリピン、韓国、日本の新聞記事（1957年4月、1958年6月のThe Japan Times、The Mainichi）などがノーベル委員会に提出されている。Brevet fra Erling Wikborg til det Norsk Stortings Nobelkomité, den 1. september 1958, Buchman, PFL Bilag 1958 (B-S).
- 21) ブックマン（M R Aハウス編）、前掲『世界を再造する』、20、329、332～333頁。財団法人M R Aハウス・ホームページ<<http://www.mrafoundation.or.jp>>。鳩山一郎『鳩山一郎回顧録』（文藝春秋新社、1957年）、189頁。鳩山薫、鳩山一郎（伊藤隆、季武嘉也編）『鳩山一郎・薫日記 下巻 鳩山薫篇』（中央公論新社、2005年）、252頁。『鳩山一郎・薫日記』には、相馬雪香らM R A関係者が鳩山邸を度々訪問していることが記されている。
- 22) Letter from Niro Hoshijima and Shizue Kato to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 31 December 1958, PFL 8/1959 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1959.
- 23) Letter from Nobusuke Kishi to the Nobel Peace Prize Committee, dated 22 January 1961, PFL 82/1961 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1961.
- 24) ブックマン（M R Aハウス編）、前掲『世界を再造する』、355～356頁。
- 25) Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1951, s.15-37. Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1952 (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1952), s.15-17. Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1953 (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1953), s.15-17. Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1954 (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1954), s.30. Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1961 (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1961), s.30-32. 日本からの推薦状が年次報告書に利用されたと考えられる事例として以下がある。1953年の年次報告書には、M R Aが日本と第二次世界大戦時の敵との良好な関係づくりで活動したとの言及がある（Redegjølse for Nobels Fredspris 1953, s. 17）。また、1961年の年次報告書には、岸前首相がドイツのアデナウアー（Konrad Adenauer）、フランスのシューマン（Robert Schuman）とともにM R Aを公然と支持する有力政治家として取り上げられている（Redegjølse for Nobels Fredspris 1961, s. 31）。
- 26) Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1952, s.7-8.
- 27) Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjølse for Nobels Fredspris 1953, s.8-9, 14.